

談話資料の視点から見た画中詞

－『福富草紙絵巻』を対象に談話分析の研究方法を試みる－

そめ や ひろ こ
染 谷 裕 子

〈要 旨〉

室町から江戸初期に多く作られたお伽草子絵巻には本文とは別に絵の傍らに画中詞(登場人物のセリフや場面の説明など)が付されることがあるが、その一つ『福富草紙絵巻』(春浦院本)は、いわゆる物語本文がなく、絵と画中詞(セリフ)だけで物語が構成される希有な作品である。本稿ではこの絵巻を一種の「談話資料」とみなして、現代語における談話資料の研究法の適用を試み、その談話的特徴を探るものである。『福富草紙絵巻』の画中詞は、上下二巻にバランスよく配置されており、すべての画中詞が物語と関わっている。各巻の中心人物の長いセリフによって重要な心情が語られ、その他大勢の多くのセリフによって物語が進行する。特に、話し手の感情や意志を表すセリフによって場面の状況がよりわかりやすく描写され、情報提供を求めるセリフによって物語の経緯が明らかになり、命令や勧誘等を表すセリフによって登場人物の動きが表現される。以上のことから、『福富草紙絵巻』の画中詞は、描かれた絵になぐさみにセリフを付したのでは決してなく、十分に絵の表現と物語の展開を理解した上で、ことばを選び抜き効果的に付したものであると考える。

〈キーワード〉

福富草紙絵巻, 画中詞, 談話分析, 発話機能, 福富長者物語(異本)

1. はじめに

「画中詞」とは、絵巻や奈良絵本において、本文の詞章とは別に絵の中に記される詞章をいい、これには、登場人物のセリフ、人物名や地名、絵そのものの説明文等がある。この画中詞をもつ絵巻は、本稿でとりあげるお伽草子の絵巻以外に、鎌倉時代の一部の説話絵巻、鎌倉時代から室町時代にかけての小絵の白描物語絵巻に集中しているという¹⁾。

絵と詞章で成立しているはずの絵巻において、あえて詞章とは別に画中詞を付するのはなぜか。

絵と詞章との関わりから画中詞の機能について考察した先行研究においては、画中詞の中でも登場人物のセリフに注目し、物語本文との言語の質の違いについて指摘されてきた。「当時の口語—話しことばが生き生きと息づいている」(岡見 1983)、「画中詞はまさに中世語の饗宴の場」(小峯 1992)などに代表されるように、画中詞には当時の口語表現が映し出されているという見解が示されてきたように思う。

ただ、確かに当時の口語表現が画中詞の中に表れてはいるが、場合によっては「それらしさ」を強調して表現している場合もありうる。『鼠の草子絵巻』において身分の低い者が当時の東国方言を用いているという指摘(出雲 1995)はその可能性を示唆するものである²⁾。

また、個々の作品によって、あるいは伝本の違いによって、画中詞の言語のありかたも異なってくるように思う。

筆者はかつて28本のお伽草子の絵巻や奈良絵本の画中詞について、日本語学の立場から考察したが、その全体を覆う共通項は「口語表現」というよりも、「話し手の感情を出来るだけ直接に表現しようとする意向」と「絵に付随しているゆえの表現の特性」が見られる点であるとした³⁾。が、なぜ画中詞を付したのかということまでまだ考えが及ばなかった。

ただ画中詞を含む資料を見ているうちに、画中詞(特にセリフ)と物語本文、絵との関係を考えていく上で、次の三つの作品に代表される各類の特徴をつかむことによって、それが見えてくるのではないかと考えるに至った⁴⁾。

1類：福富草紙絵巻(春浦院本)

2類：稚児今参物語絵巻(細見美術館蔵本)

3類：鼠の草子絵巻(東京博物館蔵本ほか)

1類は、物語本文がなく絵とほぼセリフの画中詞だけで成立している作品⁵⁾、2類は本文とは別に画中詞を追うだけでも物語を味わえる作品、3類は画中詞が物語を逸脱する作品である。1類は画中詞の表現機能を純粋に追うために、2類は画中詞を本文の会話文と比較する上でその表現機能の特性を考察するために、3類は本文とは別の道を歩み出した画中詞の表現特性と目的を考える上で興味のある作品である。

本研究では1の『福富草紙絵巻』の画中詞をとりあげることにする。画中詞は若干の例外を除いて全て登場人物のセリフであり、絵とセリフのみで進行する物語である。かつて使用されている語彙の観点から考察したことがある⁶⁾が、今回は方法論として、現代語の談話研究方法の適用を試みてみたい。形の上では現代の会話表現に匹敵するという点に注目するからである。

2. 福富草紙絵巻(春浦院本)

テキストとしては『福富草紙絵巻』の二巻本(京都妙心寺春浦院蔵：春浦院本)を用いる。同絵

巻の最古の伝本である⁷⁾。

『福富草紙絵巻』は放屁の芸による成功譚と失敗譚からなる。あらすじは以下の通りである。

貧しい秀武翁は、妻の勧めで神仏に祈誓したおかげで、「綾つつ錦つつ黄金さらさら」というめでたい音のする屁を放つ芸を身につけ評判を得て、中将の屋敷にまで呼ばれ多数の引出物を得て大金持ちになるまでが描かれる。(ここまでが上巻)

一方、秀武翁の大成功を知って、隣家の福富織部の妻がうらやみ、夫に秀武翁の弟子入りを勧め、福富は秀武から放屁の芸を習うが、秀武にだまされ、中将の邸で放屁どころか糞をまき散らすという大失態をやらかし、さんざんな目にあう。妻は夫の愚かさを罵倒しながらも医者に薬をもらいに行き介抱する。一方で秀武に対する憎悪はおさえきれず、神仏に呪詛し、ついに大道で秀武を見つけその腕に噛みつく。(以上が下巻)

原本の成立は14世紀末以前とも言われる。春浦院本は後崇光院(1372-1456)の宸筆と伝えられ、それが確かであることが榊原(1987)によって証明されている。

春浦院本は『続日本の絵巻27』(1993)等でカラー図版や影印本で全体像を見ることができ、『室町時代物語大成第十一』(1983)等で翻刻もされている。また、小山聡子・五月女肇志・原田由来恵「『福富草紙』注釈」(2007 ①②)がある。本文の判読できない部分やクリーブランド美術館蔵の古絵巻による錯簡の補いについては、『室町時代物語大成』(以下『大成』と呼ぶ)や「『福富草紙』注釈」(以下『注釈』と呼ぶ)を参考にする。

なお、この絵巻はたびたびの補修によって紙継ぎが誤った状態で現在に伝わっている。その復元については諸説ある⁸⁾が、ここでは本文照合の便宜から『大成』の示す順番によって読み進めていくことにする。また、実際の本文に句読点はないが見やすくするために『大成』に倣って句読点を記す。

3. 先行研究と分析方法

『福富草紙絵巻』二巻本の画中詞の表現機能について論じたものとして、美濃部(1978)、吉橋(2009)がある。美濃部は多く付されたセリフが場面に彩りや喧騒をもたらす役割を担っていることを指摘したが、吉橋はそれだけでなく特に見物人たちのセリフが「場の共通心理を示したり、物語上必要な時間や距離感を生み出したりするなど、重要な役割を果たしている」という。また、物語の進行上、意識的に描かれた絵がセリフと連動していることも指摘している(場面の境に「指さす半身」の人物が描かれ、そのセリフは次の場面の予告説明であるという)。

これらは、いわゆる地の文で進行する物語の詞章にはない画中詞の表現機能の特徴を指摘したといえよう。画中詞の役割は口頭語らしさを表現するだけではなく、むしろそれ以上の役割が画中詞にあることを教示してくれる。

そして、これらの指摘は、絵巻のセリフが演劇の台本にたいそう近いものであることを予想させてくれる。実際に美濃部(1985)が別の絵巻において、その言葉の比較を通して絵巻の詞章は物語そのものを、画中詞(セリフ)は演劇的に物語を、別々に享受していけることを指摘している。

こうした指摘をさらに言語学的な視点から考えることができないだろうか。筆者が常々考えてきた問題であるが、このたび「古典文学作品におけるテキスト談話研究」(平成22・23・24年度科学研究費補助金 基盤研究(C)高崎みどり研究代表)を通じて現代語談話研究の文献を読む機会に恵まれた。その中で現代語の談話研究の手法を落語の分析に用いた野村(1995・1996)の研究が目にとまった。「ストーリーを持ち、複数の登場人物の会話や対話を一人の話者が演じる」という落語は、『福富草紙絵巻』の画中詞とは、場面が視覚的に示されるか否かという点で大きな違いがあるものの、その享受のしかたは互いに類似している。

そこで、本研究では、まずはこの落語における野村氏の談話分析の方法を『福富草紙絵巻』の画中詞分析にはほぼそのまま適用させていただき、落語での分析を参考にしながら『福富草紙絵巻』の画中詞の傾向を見ていくこととする。

4. 談話分析の適用その1 発言数と発話数

野村(1995)は落語「火焰太鼓」の本題の部分について談話分析を行った。

本題はいくつかの場面に分けられる。野村は、各場面を「談話」とし、「談話」を構成する最小の単位を「発話」(文が相当することが多いが、必ずしも一致しない)とし、また、1回の言述にはいくつかの発話が含まれることがあるが、この1回の言述を「発言」と呼び「発話」と区別する。

この「談話」「発話」「発言」を『福富草紙絵巻』の画中詞に適用してみることにする。

『福富草紙絵巻』(春浦院本)は、25の場面(上巻12場面・下巻13場面)から成る。前述の通り、分け方や順序に異同があるため特に問題となる箇所には番号を□で囲んでおく。〈 〉は現存本の継ぎ順。

・上巻

- 1 □ 老いた秀武夫妻の貧しい生活ぶり。(画中詞なし)〈12紙〉
- 2 向き合う秀武夫妻。祈願のための御幣を竹に貼り付けている。〈18・19紙〉
- 3 重たい御幣を担いで杖をつきながら、神社に一人で向かう秀武。〈7紙〉
- 4 神に祈願する秀武。〈8紙〉
- 5 夢を見た秀武が陰陽師に夢解きを依頼する。〈13紙〉
- 6 秀武は見事な屁をひり、陰陽師、尼ともにあきれ驚く。屏風の後ろから覗く女二人も笑いこぼる。〈10・11紙〉

- 7 町中でめでたい屁を放つ秀武。物売女と子、稚児を肩車する大入道、狩衣男、子を抱く女など大勢の観客。離れた所に中将一行の牛車。遠くから様子を見ている。従者たちにも笑いがもれる。〈14・15・16 紙〉
- 8 秀武を中将のとこりに連れて行こうとする従者2名。子どもが杓を持って走ってくる。〈17 紙〉
- 9 中将邸に呼ばれ、芸を披露する秀武。建物の中からも外からも秀武の芸に注目している。中央の秀武を中心に屋敷内、前庭に、垣根の外からさまざまな身分の人たちが見物。〈1～3 紙〉
- 10 芸のおかげで引き出物をたくさんもらって帰る秀武。引き出物は童二人にもたせる。その様子を狩衣男と子どもが見ている。〈4 紙〉
- 11 老妻と語り合う秀武。それを見ている女と老女。〈5・6 紙〉
- 12 お礼参りにいく媼と秀武。下女と童を従える。秀武は一步先を行き、僧と話している。〈9 紙〉

・下巻

- 1 豊かに暮らす秀武夫婦。暈の上で、着物を被き談話。屋敷の内外で働く従者たち。そこに中将殿の使者が秀武を呼びに来る。〈1・2 紙〉
- 2 秀武邸の隣に住む福富夫婦。うらやむ媼が福富に秀武の弟子になることを勧める。〈3 紙〉
- 3 隣家の秀武に弟子にしてほしいと願う福富。調子よく応じる秀武。〈4 紙〉
- 4 (秀武から秘術を教えてもらい) 中将殿の屋敷を訪ねる福富。〈5 紙〉
- 5 福富は、殿の面前で、芸を披露しようとしたところ、大失敗。屁をひるどころか、糞尿をまき散らし、周囲から大ブーイング。打擲され追い出される。〈6・7 紙〉
- 6 血だらけになって哀れな姿で大路を帰る福富。童がからかう。町の者たちは興味津々で見つめる。老妻は手柄をあげたと勘違い。〈8・9 紙〉
- 7 血だらけの福富が赤い御衣を被いて戻ってきたと勘違いした媼が古衣を焼き払う。不安に思う嫁。見ていてあきれ老尼。〈10 紙〉
- 8 糞だらけの衣を脱いで裸の福富。それに鼻をふさぎながら、夫を責める媼。〈11 紙〉
- 9 福富妻、薬を夫に勧める。〈14 紙〉
- 10 福富の腰を踏んでやる媼、鍋の汁を勧める童、痛がる福富。〈12 紙〉
- 11 医師のところに薬を乞いに行く福富妻。〈15 紙〉
- 12 みさきの神に秀武の悪事を訴え、秀武の災いが起こるように呪詛する福富妻。〈13 紙〉
- 13 夫の敵を討つために大路で秀武を見つけ襲いかかる福富妻。それも見物する道行く人々。〈16～18 紙〉

それぞれの場面での発言数と発話数は表1に示す通り。「平均」は1発言あたりの平均発話数を表す。）

発言数は100(上巻48・下巻52)、発話数は224(上巻99・下巻125)から成っている⁹⁾。

上巻に一つだけ発言が全くない場面があるが、それ以外の場面では必ず発言がある。上下2巻の発言数はほぼ同数でバランスが取れている。意識した配置といえるかもしれない。

表1『福富草紙絵巻』各場面の発言数と発話数

場面	発言数	発話数	平均	場面	発言数	発話数	平均
上巻1	0	0	-	下巻1	7	13	1.9
上巻2	3	4	1.3	下巻2	2	7	3.5
上巻3	2	4	2	下巻3	2	7	3.5
上巻4	1	2	1	下巻4	2	7	3.5
上巻5	2	5	2.5	下巻5	9	20	2.2
上巻6	5	10	2	下巻6	5	7	2
上巻7	6	7	1.2	下巻7	3	7	2
上巻8	4	8	2	下巻8	4	15	3.75
上巻9	12	21	1.75	下巻9	2	4	2
上巻10	4	7	1.75	下巻10	3	6	2
上巻11	4	18	4.5	下巻11	2	9	4.5
上巻12	5	13	2.6	下巻12	1	4	4
				下巻13	10	19	2.7
上巻合計	48	99	2.1	下巻合計	52	125	2.5

特に発話数の多い場面は、上巻9, 11, 下巻5, 8, 13である。これらの平均発話数に注目してみると、上巻9と下巻5や下巻13では2.0前後であるの対して、上巻11と下巻8は4.0前後とかなり多い。上巻9と下巻5は絵巻中最も多く的人物が登場する場面である。それぞれ秀武(こちらは大成功)、福富(こちらは大失敗)が放屁の芸を中将の屋敷庭で披露して、多種多様の見物人や二人に関わる従者たちの多数の発言がちりばめられている。一方、上巻11と下巻8は、それぞれの夫婦が対峙する場面で、それぞれ、大成功をおさめた秀武の自慢話、大失態を演じた福富に対する福富妻のきびしい叱責、それぞれの感情からつい話も長くなる。こちらは特定の人物の長い発言である。上巻9の後に上巻11を、下巻5の後に下巻8を、これもまた意識した画中詞の配置と言えるのではないか。

もう少し詳しく見ていくために、表2に1回の発言と発話数の関連、さらに特に発話数の多い場合は発話者との関連を示した。

表2『福富草紙絵巻』1 発言の発話数の状況

1 発言の発話数	台詞	話者
1	37	※うち 31 はこれのみの発言
2	31	
3	18	
4	8	秀武・下藤・医師・使者・福富妻
5	3	中将・福富・福富妻
6	1	秀武
9	1	福富妻
11	1	秀武
合計	100	

1回の発言は1発話(多く1文)が最も多く、2発話(2文)、3発話(3文)とこれに次ぎ、3発話以下の発言が全発言のほぼ9割を占める。1発言1発話の短いセリフは、自然会話のように応答がないので、独白のように見えるが、ほとんどの場合傍らにそのセリフを聞く人物が配置されている。たとえば、上巻7場面で、秀武の屁放りに興じて物売女が「これをみるに、物うらん心もうせてなし」というセリフがある。これは思わず発した独り言と考えることもできる。が、すぐそばに物売りの子どもがいて、この子に対する語りかけとも考えられる。実は、画中詞ではこういう例が多い。自然な会話ならば応答のことばがあるのだろうが、そこまで画中詞では記さない。絵をみていると応答の声が聞こえてくるようである。しかもこれらの会話の話者は多くたった1回登場するだけである。そして、これらの短いその他大勢のセリフによって「実況中継」のように物語が進行する。しかし、適当なセリフの付け方ではない、十分に計算された付け方である。物語からそれる発言は全くない。

一方、1発言4発話以上で構成される発言も見られる。下記の通りである。

- ・4発話：秀武 (→従者, →福富, →福富妻) 下藤(→秀武) 医師(→福富妻)
使者(→秀武) 福富妻 (→福富, →神仏)
- ・5発話：福富(→中将の家人) 中将(→下人) 福富妻 (→医師)
- ・6発話：秀武 (→僧)
- ・9発話：福富妻 (→福富)
- ・11発話：秀武 (→妻)

秀武と福富妻の発言が複数例見られ、かつこれらの発言には1回の発言が9発話(福富妻)、11発話(秀武)というようにきわめて長いセリフが見られる。秀武は屁放り芸で大成功を収めた前半の主人公、福富妻は秀武に騙された失態を演じた福富の恐妻であるが、後半の主人公といってもよい。秀武は自分の榮譽を妻に語る場合、福富妻は夫を叱責する場合に特に発言が長い。共に発言相手に対して心理的に上位にある。実は秀武妻も最初は多弁であった。芸を習得する前の秀武に対して老体の夫に神頼みを強く勧めている。が、願い叶ってからの口数は少ない。野村(1995)でも、落語「火焰太鼓」で、最初強気であった妻は夫が古太鼓で大金を手に入れてから

は発言が少なくなる。妻は夫に満足すると口数が少なくなるというのはいつの時代も同じことか。

上記以外に比較的長い発言をする人物は、身分的な上位者(中将, 医者)と、上位者の命を伝える者(使者・従者)である。次の福富の場合(下巻4)は、秀武から習った芸を披露して自分も成功したいがために、実は自分が秀武より上だとあえて偉ぶっている発言である。「身分的、心理的上位者はセリフが長い」という傾向を指摘できる。

下4-1: ふくとみは、七条のほうのとね也。

- 2: この秀武といふやつのする、さえをたに、殿原は、めてさせ給うなり。
- 3: すやつは、福富の、かたはしを、おしへるをたに、殿原は、めてさせ給なり。
- 4: まして、ふくとみかはしなれ。
- 5: おさめのをたて、ひりつけんは、殿原は、めてさせたまひなんと申。

さらに発話数の多い人物(5以上)の発言数および発話数を表3に示す。

これによれば、全体の発話数においても、秀武と福富妻の発話は圧倒的に多い。また、1回の発言において平均発話数が最も多いのは福富妻である。この物語の全体の中心は福富妻にあるといってもよからう。

表3 『福富草紙絵巻』話者ごとの発言数・発話数・平均発話数

	発言数			発話数			全体平均
	上巻	下巻	合計	上巻	下巻	合計	
秀武	13	4	17	40	14	54	3.2
秀武妻	4	1	5	9	1	10	2
福富	0	7	7	0	19	19	3.2
福富妻	0	10	10	0	38	38	3.8
中将	3	1	4	5	5	10	2.5
老尼	1	1	2	3	2	5	2.5
陰陽師	2	0	2	5	0	5	2.5
童(孫?)	0	2	2	0	5	5	2.5

5. 談話分析の適用その2 発話機能の分析

野村(1996)では、先の落語「火焰太鼓」の本題の部分について、さらに発話機能からの分析を行っている。野村が分析の基準としているのが、ザトラウスキー(1993)の発話機能の分類である。ザトラウスキーの分類の概略を以下に示す。

1. 注目要求: 「呼びかけ」の類。「もしもし」「あのね」
2. 談話表示: 談話の展開そのものに言及する「接続表現」「メタ言語的発話」など。話を終了したり、話題を展開したりす

ることを直接に示す発話。「じゃあ」「だから」

3. 情報提供：実質的内容を伝える発話で、客観的事実に関する質問に対する答えをも含む。
4. 意志表示：話し手の感情、意志等を表示する発話で、それらに関する質問の答えも含む。
5. 同意要求：相手の同意を求める発話。「でしょ?」「よねえ」
6. 情報要求：情報の提供を求める発話で、「質問」の類が多い。
7. 共同行為要求：「勧誘」等のように、話し手自身も参加する行為への参加を求める発話。
8. 単独行為要求：話し手が参加しない、聞き手単独の行為を求める発話。依頼、勧告、命令等。
9. 言い直し要求：先行する発話がうまく聞き取れなかった場合の発話。
10. 言い直し：先行する発話を繰り返す、あるいは、多少言い換えてもう一度述べる形の応答である。
11. 関係作り・儀礼：感謝、陳謝、挨拶等の良い人間関係を作る。
12. 注目表示：「相手の発話、相手の存在、その場の状況・事物の存在などを認識したことを表明する。「同意要求」に対する応答…を含む」(国立国語研究所 1987)等を参考にザトラウスキーはさらに 11 種に分ける。
 - ㉓継続：先行する発話に暗示された意味を認めないまま、単に話を継続させる「うーん」「はい」「(笑い)」
 - ㉔承認：先行する発話に暗示された意味を認める。「おう」「ああ」「はいはい」
 - ㉕確認：先行する発話の繰り返しによる確認。
 - ㉖興味：興味や関心を示す。「へーえ?」
 - ㉗感情：感情を示す。「まじー?」
 - ㉘共感：相手と同じ感情を抱いていることを示す。〈同意要求〉〈単独行為要求〉の後に続くことが多い。
 - ㉙感想：相手が言った事柄に対して感想を述べる。「まじー?」「何だよ、それ?」
 - ㉚否定：「感謝」「陳謝」等を打ち消す。「ううん」
 - ㉛終了：話を終了してもいいことを表す。「わかったわ」「うん、うん、・・・はい」
 - ㉜同意：㉓～㉛を受ける発話の機能。「(笑い)」「うーん」「うん」
 - ㉝自己：自分で自分の発話に相づちを打つ、思い出す、気づく等。「そうですね」「うーん」「あっ」

(『日本語の談話の構造分析』「4.6 発話機能の定義と種類」P67 - 71 より)

ザトラウスキーの分類は「勧誘の談話」の構造解析のために設定されたものであり、実際の電話の談話資料を用いている。『福富草紙絵巻』の画中詞は自然な会話ではないことはいうまでもない上に、電話のような1対1の対話だけではない。従って、そのまま適用するには無理があろう。しかしながら、自然な会話に見られるこれらの傾向がどの程度『福富草紙絵巻』に見られるかによって、『福富草紙絵巻』の「会話性」なるものを見ることができないのではないか。従来の画中詞における「口語性」という表現の評価に終わらず、広く談話としての画中詞の性格を探ることができるのではないか。本稿では、そう考え、分類の適用を試みてみる。次にその例を示しつつ解説を加えていくことにする。

《注目要求》¹⁰⁾

- ・や、申さん。よく／＼して、たもち給へ。(下巻3:秀武→福富／注目要求+単独行為要求)

秀武が福富に放屁の芸を伝授する場面である。実はでたらめを教えるのであるが、わざとらしく畏まって言っている秀武の様子がこの「やや申さん(=もしもし申しますよ)」に表現されている。

「注目要求」は呼びかけの表現であるから、セリフだけで進む『福富草紙』には多数出現するかと思いきや、実はそうでもない(表4参照)。会話らしさを出すために「のうのう」のような呼びかけは見られず、最小限で必要な表現が選ばれている。上記の他に、秀武妻や福富妻の用いる、強気の呼びかけ「おいおい」、対して秀武や福富の用いる、弱気の呼びかけ「あが君」などにもその人物描写からの「必要性」を見ることができる¹¹⁾。

- ・おい／＼、まうつるそ(上巻12:秀武妻→供え物が重くてなかなか歩めない童たちに／注目要求+共同行為要求)
- ・こもとを、ふむへきか。いかはかり、ふみおられたるそや。おい／＼。(下巻10:福富妻→大失態で打擲され寝込む福富に／情報要求+情報要求+注目要求)¹²⁾
- ・これ、はつしたへ。ことはり／＼。あか君／＼、おんなとも、たすけ給へ(下巻13:秀武→嘸みつく福富妻に／単独行為要求+注目表示(共感)+注目要求・単独行為要求)

《談話表示》

- ・さても、このみてくら紙は、いかて、もたいたりけるそ。(上巻2:秀武→妻／談話表示+情報要求)

このセリフの前に秀武妻の次のセリフがある。貧乏脱出のために神仏に祈誓することにした夫婦が捧げる幣を整えている場面である。

- ・このかみ、物まうては、祈のしるし、かならずありなん。昏もおしくも(な)(し)。すゝめらるれは、かならず、しるしあせたまへと、よくよく祈申たまへ。(上巻2:秀武妻→夫／情報提供+意志表示+単独行為要求)

祈誓は妻が考え気弱な夫にしっかり成し遂げるように勧めている。その妻の説教じみた口調に嫌気がさしたか、はぐらかすような秀武の「それにしても、この御幣は、どうやって(長い間)持ちこたえてきたのかね」という発言である。

「談話表示」の発話機能を持つ表現は他にもあるが、共にその場の話題をはぐらかすような発言に見られることが多い。下の例は相手の要求を「沓がない、足駄ではどうか、周囲も落ち着かないし…」と遠回しに断っている場面である。

- ・されとも、あしたにては、いかてか。沓はきてこそ、まいらめ。物さはかしくは、などまとはしうこそ。(上巻8:秀武→「とくまいりたまへ」という申将從者に対して／談話表示・不同意要求+意志表示+意志表示)

《情報提供》

物語を実質的に進行していく役割を《意志表示》と共に果たしている。

次は放屁の芸ですっかり裕福になった秀武のセリフ。妻への報告を通して、中將家での大成功より後の状況がわかる。

・御使に、中將殿にめし入て、紅の御そ、給はりて、いつるより、殿原にめし入て、かくたまはり、あつめたるなり。このかりきぬは、小家によひ入て、くれたりつるそ。我も／＼と、よひくれとも、くるしかりつる程に、にけてきぬるそ。(上巻 11: 秀武→秀武妻／情報提供+情報提供+情報提供)

次は、医者言葉であるが、このセリフを通して、なぜ福富が大失態を演じたかがわかると同時に秀武の悪事が明らかになる。

・朝顔のみは、ひとつ(た)(に)、腹とくる物なり。十までも、すきてんには、よき事、ありなんや。
(下巻 11: 医師→福富妻／情報提供+情報提供+意志表示)

《意志表示》

『福富草紙』のセリフの中で最多の類(表 4)であるが、主要人物の心情の表現だけでなく、その他大勢のコメント(感想)が物語の描写に重要に関わっている。

たとえば、秀武の芸のすばらしさについては、「おかしさに、はらはた、きれぬはかりな」「めもあやなる、さえするやつかな」「ねのおかしさよ」などの感想によって、引出物の多さについては、それを運ぶ童たちの「おもき物かな」「くひはおれぬへ(う)」といった感想によってより明らかになる。

また、最後の福富妻が秀武にかみつ場面では「あなおかしや／＼」(折烏帽子の男)と単純におもしろがる者、ただ呆れる者「いみしう、たけき女かな」(市女笠の女)、同情して「ふとねかめの、する事もことほりなり」(笠・足駄の僧)などと様々な方面からのコメントが物語に奥行きをもたらしている。

《同意要求》

《意志表示》に含めてもいいように思うが、次のような例をこの類に含めてみた。

陰陽師の夢判断があたったことを喜ぶ秀武のセリフ。「まさしく」と終助詞「かし」を用いて当の陰陽師に同意を求めることによって相手を持ち上げている。

・ゆめは、あはせからなり。まさしく、あはせたまひたる事なりかし。ひりて、きかせたてまつらん。
(上巻 6: 秀武→陰陽師／情報提供+同意要求+意志表示)

これに対して、芸を見た陰陽師は「あはれ、希有の事かな。なにかしとも申し、よくあはせたりかし。」と「よく」と「かし」を用いて「(自分であることをぼかして)どこの誰だかしらないけれどよく占ったものですか」とこちらも同意要求で応じている。

《情報要求》

いわゆる疑問文の形がこれに当たり、その例は少なくないが、次のような「情報要求→情報提

供」という隣接ペアはあまり見られない。

・琵琶法師1：なにわらふそ

琵琶法師2：かうしきし、とねか妻を、わらふとそきく(下巻12)

秀武の芸を網代から覗く女が「いかてこは、ならひたるそよ」(上巻9)、秀武邸を訪問した使者が「かうしきは、おはするにや」(下巻1)、中将邸で大失態をやらかした福富を見て下人が「これは七条の、ふくとみにあらずや」(下巻5)と発しても応答は表現されることなく、情報要求に対して情報提供がなされることはほとんどない。

《共同行為要求》・《単独行為要求》

セリフ全体の中でこれらのしめる割合(ほとんどが「単独」)は、「意志表示」、「情報提供」に次いで高い(表4参照)。「行為要求」(命令や勧誘等)は相手あって必ず成立するセリフゆえ登場人物同士のやりとりが表現され、絵に動きをもたらす。

・あれはなにをみるぞ、いさいてみん、おれら。(上巻7:中将供人→別の供人/情報要求・共同行為要求)

・その紅のきぬ、かつけよ。(上巻9:中将→供人/単独行為要求)

・たゝすり、すゝりたまへ。(下巻9:福富妻→福富/単独行為要求)

・おとすなよ(上巻10:秀武→引出物を持つ童たち/単独行為要求)

そして、承諾するしないに関わらず、これらの発言を受ける《情報要求》と同じく応答はほとんど示されない。下記の狂言の台本ように応答(下線部)が示されることはない。

(主)あるかやい

(太郎冠者)お前に

(主)汝よび出す事、別成事でなひ……又むこ殿の御ざつたらは、こなたへ申せ

(太郎冠者)かしこまっております

(虎明本「鶏聳」)

《言い直し要求》

相手の発言が聞き取れないために要求する言い直しは見られず、すべての例が相手の発言に納得がいけないために問い直す形の「何を言うのか」にあたるものである。

・女房：年よいたる物は、あはれし。けにたゝ、とくおひいたしてはや。(意志表示+単独行為要求)

近侍：なに事を、のたまふそ。かはかりの、ぬす人をは、よくこらしめてこそやらめ。(言い直し要求+意志表示)(下巻5)

《言い直し》

・とうまいりたまへ。とうまいれと、仰事ありつる物を。(上巻6:中将従者→秀武/単独行為要求+言い直し)

正確には下線部は従者の主人である中将の言葉であるが、内容の上では繰り返し発言と見てよかろう。なお、この直前に別の従者も「たゝとく、まいりたまへ」と言っている。これに対して沓をは

いていないことを理由に断る秀武をたしなめての、上の発言である。どうしても秀武の芸を見たいという切迫した気持ちが「早くおいで下さい」という言葉の繰り返しによって表現されている。セリフならではの表現である。

《関係作り・儀礼》

人間同士の挨拶表現は見られず、神仏への祈願の決まり文句「あなかしこ」や念仏「あみだぶ」が見られる。

- ・あなかしこ△△、さい拝△△、たかむこの秀武申す。(上巻4:秀武→道祖神)

《注目表示》

会話らしさを表す表現であるが、多くは見られない。

- ・ことはり△△。(下巻13:秀武→夫をひどい目に合わせたことに怒る福富妻/注目表示・承認)
- ・いて、この夢は、いとかしこき、ゆめなり。(上巻5:陰陽師→夢の話をした秀武/注目表示・興味+情報提供)
- ・あはれ、希有の事かな(上巻6:陰陽師→放屁の芸を見せた秀武/注目表示・感動+意志表示)
- ・けに△△、まるも、さおもふ(下巻2:福富→秀武に芸を習えと勧める妻/注目表示・共感+意志表示)

『福富草紙絵巻』画中詞のセリフをザトラウスキーの各分類に当てはめて、数量的に示したものが表4である。

表4『福富草紙絵巻』の発話機能

発話機能	単独	組合せ	合計
1	7	12	19
2		3	3
3	43	15	58
4	79	12	91
5	4	1	5
6	12	7	19
7		2	2
8	41	4	45
9	3		3
10	1		1
11	3		3
12	1	4	5
	194	60	254

全発話の3分の1以上が4の「意志表示」にあたる。『福富草紙絵巻』は状況の把握は絵により、主に登場人物の感想や意見によって物語が進行する。たとえば、秀武の屁ひり芸は、「(老尼)おいのしるしには、かる事を、みるこそ、うれしけれ」「(布衣男)めもあやなる、さえするやつかな」「(物売女)これをみるに、物うらん心もうせてなし」「(網代垣から覗く女)ねのおかしさよ」などといった感想からその芸の見事さを、また、秀武邸で働く女たちの「あはれ、これとく、はかりおさめはや」「あまり、いたくつけは、かひな、たゆくこそあれ」「てもたゆく、ひくらしたる、よねかな」という感想から秀武の異常なほ

どの裕福さを想像するのである。

また、独白で心情を吐露するもの(対話ではないが「読者」に対する意志表示と見る)があり、発話者はすべて男性である。たとえば、妻に貧困打破のために祈願を勧められた秀武のセリフ「朝

風の、いみしう、おもてに、しむかな、たへがたや」、妻にそそのかされ隣家で教えられた芸を披露し大失態を演じた福富のセリフ「よしなき女どもの、物うらやみに、老のはてに、かるめをみつる、かなしさよ」などがあるが、どちらもたくましい女に対する男の弱さが表現されている。

なお、4は「こそ」による係り結び、「かし」「かな」「ぞ」「な」「や」「よ」などの終助詞、「あはれ」「あな」などの感動詞を伴うことが多い。

次いで、3の「情報提供」、8の「単独行為要求」が続く。

この三種で全セリフの約7割を占める。すなわち、『福富草紙絵巻』の画中詞(セリフ)は、事実を見た意見や感想、事実の説明、他者への命令から全体が構成されていると言える。

6. 異本『福富長者物語』との比較

さて、注7でふれたように『福富草紙絵巻』には、春浦院本のような二巻本と異なる系統の一巻本、一般に『福富長者物語』と呼ばれる系統の伝本群がある。一巻本の絵は二巻本下巻の絵と共通しているが、本文は全く異なる。

セリフの画中詞だけでほぼ構成されている二巻本に対して、一巻本は一篇の物語という詞章からなる。また、共に放屁をめぐる成功と失敗という内容から成るが、二巻本はその成功者が「秀武」、失敗者が「福富」であるのに対して、一巻本はその成功者が「福富」、失敗者が「乏少」となっている¹³⁾。

両系統の本文の関係については諸説あるが¹⁴⁾、本節では、この異なる系統の伝本の次の2点に注目して、一巻本の物語文の中の会話文と、すでに見てきた二巻本のセリフの表現的特徴との比較を試みることにする。

①一巻本は二巻本下巻の絵と共通し、主人公の名前は変化しているもののその物語の内容は一致している。

②二巻本はセリフのみからなり、一巻本は物語文からなる。

一巻本のテキストは、『室町時代物語大成第十一』に翻刻されている赤木文庫蔵の絵巻(作品番号 341)を使用する。『大成』によれば、一巻本の系統で最も古いとされる伝本である。

物語本文の中の会話文を取り出して、各場面¹⁵⁾ごとの発言数と発話数を表5に示す。ただし、一巻本には本文の会話文以外に絵に付した画中詞(セリフ)が若干見られる。それらを()で示す。

二巻本(表1)と比較すると、一巻本は1発言あたりの発話数が極端に多いか、または少ないという特徴が見える。

表 5『福富長者物語』の各場面の発言数と発話数

	発言	発話	平均	場面説明
場面 1	0	0	0	福富の家、富貴繁盛する
場面 2	1	13	13	隣の乏少夫婦の家
場面 3	9	25	2.5	乏少、福富に弟子入りを頼む
場面 4	2	3	1.5	乏少、中將の邸に赴く
場面 5	0(2)	0(3)	0(1.5)	乏少、失態を演じ追い出される
場面 6	0(2)	0(2)	0(1)	乏少、悄然と家路につく
場面 7	4(1)	8(4)	2(4.0)	媼、古衣を焼く
場面 8	2	3	1.5	乏少裸で帰る
場面 9	2	2	1	媼、乏少の腰を踏む
場面 10	2	2	1	姥、福富を呪う
場面 11	1	1	1	媼、乏少の腰を踏む
場面 12	2	2	1	媼、医師に薬をもらう
場面 13	7	9	1.3	媼、大路で福富にかみつく
合計	32	68	2.1	

極端に長いのが、妻が夫である乏少に説教する次の発話である。

・鬼うは、或日、つまのほくせうに、むかひて申けるは、「士農工商の外の、ゆふみんは、ひとつ、ゆへつける芸の、侍りてこそ、名を四方に、かゝやかし、世を渡るものにてさふらへ。あなあさまし。そこは、何なるむかしの、かいきやうの、つたなくて、身になすのうの、おはせぬことよ。いと口おしとも、口おしや。うちよみ、はしりかき、吹はやし、立まふことこそ、ならはすとも、あの隣の福富か、一芸はかりのことは、ならはならさらん。されは、かしこに行て、いかにも打なけて、心をつくし稽古をもし、師匠とあふき、弟子とも、成たまひてよ。習に神変ある世なれば、あれほとにこそ、おはせすとも、世わたる計の、たつきは、なとかなるへき。また、すくれてきように、物したまは、隣の富は、こなたへこそ侍るへけれ。たとひ、生つきたりといふとも、なさる芸の、長し侍る事はあらし。玉はみかくに光有。とにもかくにも、ならひ給へ。それを、うけ引給はすは、御名残はおしう侍れとも、うはには、いとま出されよ。かほの、つややかなるほとに、いかなるゑにしも、さため侍らん。」と、せかする。(場面2)

二巻本でこの部分に対応するのは次の部分(下巻2)である。

[妻]いか、この隣のかうしきしの、けうのさえして、とひ人になりたるは。おほすたに、よしなき、とねまつりことして、人にのられて、いはれた(る)は、やくなきことなり。このかうしきしに、弟子ふみいたして、このさえ、ならひたへかし。いみしうこそ、うらやましけれ。

[夫]けに／＼、まろも、さおもふ、弟子文、とらせたりとも、うしろやすく、おしへんすらむやは。心みに、てしふみとらせて、ならはんと、おもふ事なり。

二巻本の妻の発言は短く、直接的であり、後の夫の発言を自然に導くものである。一巻本の発言は長く、論理的である。敬語を多用し、名言・諺を引用し、ユーモア(遊び)も見られ、自然な会話というよりも文芸的に脚色された会話文である。この後に夫の発言はない。相手のセリフは必要

ないのである。

一方、場面9と11に見られるように、お屋敷で大失態をして打擲されて戻ってきた夫の発言は極めて短い。

・「あな、はら／＼¹⁶⁾」と、云こゑも、いきの下なれは…

・よめは、おももの、おもゆ、とり／＼、すゝむれと、かほしかめて、見たにやらず¹⁷⁾、「あらいたや／＼」

・のんとかはきて、ゆみつをこふこと、隙しなければ、「うはたまへ／＼」と、わらはへのやうに、あまへてなく。

二巻本で対応するセリフはないが同じ場面と思われるところで、それぞれ次のような発言がある。どちらのセリフも第二文(波線部)に夫の切実な気持ちが表れている。が、一巻本の興味は妻の発言にあり、波線部のような夫の発話は物語の叙述の邪魔になる。

・や、あかきみ、かくなのたまひそ。とてまかくても、女どもの、したまへる事と思へは、むかひ申も、うとましきなり。(下巻9)

・あれは、しぬや。よしなき女どもの、物うらやみに、老のはてに、かゝるめをみつる、かなしきよ。(下巻10)

また、一巻本で場面1,5,6のように全く会話文が表れない場面がある。1は成功者の裕福な暮らしぶり、5は乏少が大失態をするところ、6はお屋敷で打擲され戻ってくるところであり、三場面ともに大変多くの登場人物が描かれている。二巻本ではその他大勢の発言力が大いに発揮されるところであるが、一巻本ではその他大勢の発言は物語の叙述の進行を妨げる。ただ、場面5などでは叙述だけではさすがに不十分で、画中詞として「(下人)下手の、おならこきめか、かゝるうせき。うてや／＼。」のようにセリフを残したのだろうか。場面13もその他大勢が登場する場面であるが、ここはある程度の会話文が見られる。ただし、当事者の会話や現場から少し離れたところでの会話である。

・「鬼の人くふなる、あなおそろし。」とて、逃侍るも有、又「珍し」とて、見る人も侍ける。為都、哥都といふ、二人の琵琶法師は、お日待ちよりかへりて、みち／＼、ねむかりしも、是に目覚て、「あはや、おほかみか、唐犬か。」と、あしとく、にけゆく。侍従殿、犬のしきりて鳴は、「もし盗人か。いて射殺さん。」と、小弓もて出給ひとも、鬼といふ声に、そつとして、かへらせらる。

二巻本のような妻に対する共感発言(「ふとねかめの、する事もことほなり」)や、すぐ近く見る者の(「いみしう、たけき女かな。かうしきし、しあつかひにたり」「あれみよ。ゑほうしも、おちにたり」等)のレポート発言は一巻本にはない。

一方、二巻本にない場面が一巻本に存する(絵は無い)。便宜上場面3に含めたが、乏少が成功者から放屁の芸を習い、それを聞いた妻が夫を芸の披露のためにお屋敷に送り出す場面である。4発言9発話数が見られるが、すべて妻の発言であり、夫の発言はない。先に述べた妻の最長発言の意識に近いものがこの箇所にはある。

表6『福富長者物語』話者ごとの発言数と発話数

	本文会話		画中詞	
	発言	発話	発言	発話
乏少妻	11	32	1	4
富	4	13		
乏少	6	9		
中将殿	1	2		
侍従殿	1	2		
女房(画)			1	3
通行人1	1	1		
通行人2	1	1		
孫	1	1		
夢解人	1	1		
嫁	1	1		
医者	1	1		
琵琶法師	1	1		
尼	1	2		
隣家女	1	1		
男(画)			1	1
下人(画)			1	2
女(画)			1	1
	32	68	5	11

表7『福富長者物語』の発話機能

発話機能	単独	組合せ	合計
1		7	7
2		4	4
3	7	10	17
4	22	13	35
5			
6	2	2	4
7			
8	14	6	20
9			
10			
11	1	1	2
12	1	3	4

表6に一卷本の会話文の話者を示した。一卷本で発言(発話)が多いのは、乏少妻 11(32)、乏少 6(9)、福富 4(13)である。

三人は物語の主要人物であるが、この三人だけで全体の発言数の3分の2(66%)を占める。一方、先に述べた通り、二巻本下巻ではこの三人(注:呼称は異なるが役柄は同じ。福富妻・福富・秀武)にあたる人物のセリフは下巻全体の5分の1(21%)を占めるに過ぎない。その他大勢の発言への依存度が、一卷本と二巻本は全く異なる。一卷本は主要人物の発言が重きをなし、その他大勢の発言によることはあまりない。

表7は一卷本の会話文について、その発話機能の状況を二巻本と同じように示したものである(画中詞は除く)。

全発話の約3分の1が「意志表示」であり、「単独行為要求」「情報提供」が続く。「単独行為要求」「情報提供」の順位が入れ替わるが、この三種で全体の8割近くを占める点は、先述した二巻本と同様の傾向である。ただし、細かく見ていくと二巻本のような単独での「情報提供」(先の表4参照)は一卷本では少ない。

また、二巻本にはすべての機能分類の例が見られたが、一卷本には「同意要求」「共同行為要求」「言い直し要求」「言い直し」が見られない。

7. おわりに

『福富草紙絵巻』(春浦院本)の画中詞を談話資料として捉えた場合の特徴をあげると次のようになる。

上下二巻に発言がバランスよく配置されており、すべての発言が物語の進行と関わっている。物語からそれる発言は一つとして登場しない。

1発言1～2発話のセリフが多く、全発言の9割は3発話以下で構成されている。その多くは主要人物ではなくその他大勢のセリフである。1発言4発話以上の長いセリフは主要な人物による。

発話数が多いのは主人公であるが、全体の発話数に対して主要人物の発話の占める割合は21%で、一卷本の66%に比べると決して高くない。物語の進行においてその他大勢のセリフに対する依存度が高いと言える。

セリフの発話機能は、意志表示、情報提供、単独行為要求が大方を占める。意志表示によって状況がよりわかりやすく描写され、情報提供によって物語の経緯が明らかになり、単独行為要求によって登場人物の動きが表現される。

また、注目要求、繰り返し、注目表示などによって会話らしさが表現されてはいるが、実際の会話に想像されるような無駄は極力省き、必要最低限の表現が選ばれている。狂言に見られるような応答の表現は省略されることが多い。

以上のことから、『福富草紙絵巻』の画中詞は、描かれた人物の傍らに思うがままにセリフを付したもので決してなく、十分に絵の表現と物語の展開を理解した上で、ことばを選び抜き効果的に付したものであると考える。

その意味で、『福富草紙絵巻』は、演劇的な鑑賞を想像させるものである。この絵巻の成立時期を広く室町時代と捉えるならば、それは狂言などの演劇が成長していく時期でもあり、絵巻と演劇の何らかの関連性を思わせる。ただ、本稿で一部指摘したように、画中詞には狂言台本のセリフとは異なる面もある。今後、狂言の台本等についても談話分析を適用し、画中詞の分析と比較することによって、画中詞の特性をより明らかにしていきたい。

〈注〉

- 1) きわめて限定的な作品群に集中している画中詞は、その意味で限定的な状況下で用いられた特殊な演出技法であることを示唆するという。(若杉準治「画中詞のある絵巻の成立と展開」(『王朝文学と物語絵』所収、竹林舎 2010)
- 2) 出雲朝子には「『鼠の草子絵巻』諸本の画中詞における人称詞と敬語—性差の観点を中心に」(『青山学院短期大学紀要』50, 1996・12)の論考もある。
- 3) 「お伽草子絵巻の画中詞」(『お伽草子の国語学研究』所収, 2008, 清文堂)※『お茶の水女子大学人文科学紀要』38(1985・3)所収の拙稿(「御伽草子絵巻の絵詞」)を改稿したもの。

- 4) 梅津次郎は絵巻の形式を絵と詞章との結合によって8種に分けたが、その中の第4, 5, 6種が画中詞を含むものであり、ここにあげる三種にあたる。(『絵と絵詞』『文学』1974・3)
- 5) 本来の形としては絵巻の冒頭(現状では欠)に状況説明が独立した詞書として置かれていたといわれる(石塚一雄「後崇光院筆物語断簡について」『書陵部紀要』11, 1965・10)。また、セリフに地の文がわずかに混入している箇所がある。
- 6) 「福富草紙の二系統の本文について——その語彙の比較から考える」(『人間文化研究』1, 2003・3)※『お伽草子の国語学研究』所収。
- 7) 松本隆信「室町時代物語現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』所収, 三省堂, 1978)によれば, A系統として, 京都妙心寺の春浦院蔵の室町時代頃の絵巻を代表とする, 主として二巻の体裁(上巻欠も多い)の絵巻群, B系統として, 赤木文庫や大東急記念文庫等を代表とする, 一巻体裁の絵巻群がある。
- 8) 横山重「福富草紙の詞書」(『室町時代物語集』所収, 大岡山書店, 1942), 小松茂美「能恵法師絵詞」(『福富草紙』「百鬼夜行絵巻」——画面を詞によって導く)(『続日本の絵巻27』所収, 中央公論社, 1993), 松浪久子「『福富草紙』攷 付大谷女子大学図書館蔵本『福富草紙』解題・翻刻」(『大阪青山短期大学研究紀要』9, 1981・5), 松本寧至「『福富草紙』の復元——『福富長者物語』の構成にも及ぶ」(『中世文学の諸問題』所収, 2000, 新典社)などに復元案が示されている。上巻においては, 画中詞の付されていない第12紙(老いた秀武夫妻の貧しい生活ぶりを描く)の位置(冒頭か第8紙の後か), 下巻においては, 後半の第12紙, 14紙, 15紙の位置について意見が分かれている。
- 9) セリフは独白のようにも見えるが, 傍らにその言葉を受けの人がある場合は, 「対話」と見なした。周囲に全く登場人物がない場合は, (これも読者に対する語りかけではあるが場面中では)「独白」と判断する。なお, 祈誓の場合は, 神仏に対する語りかけと考える。
また, 発言の回数は文字が続けて書いてあるかないかで判断した。同じ話者でも離れてセリフが記してある場合は別の発言とみなす。
- 10) 拡大的に解釈して放屁の音「あやつゝ, にしきつゝ」や囁くことは「たりやらちりやら」もここに含めてある。
- 11) 「おいおい」は福富妻がさらに二度, 「あが君」は福富も怒る妻に用いている。
- 12) 福富妻はさらに二度用いる。
- 13) 出光美術館蔵の一巻本の本文には成功者も失敗者も共に固有の名前がないという(筆者未見)。松本(2000), 吉橋(2009)は, 出光本は二巻本から一巻本への過渡期を示す伝本の可能性があると指摘する。
- 14) 二系統の本文の関係について見解が分かれている。三条西公正是二巻本と一巻本は主人公名が異なることから, 一巻本は二巻本とは別本であるとする(『福富草子絵について』『国語と国文学』11-11, 1934・11)。一方, 横山重(注8参照)は, 一巻本は二巻本の下巻を「そのまま模して」いるが, 本文は二巻本とは関係なく「全く別で作ったものと思はれる」(『室町時代物語集五』解説)とし, また美濃部重克(1978)は, 一巻本は, 絵は二巻本下巻の絵を模写し, 本文は二巻本の「十三図の絵を, ひたすら右から左へと辿ったもの」とする。
- 15) 一巻本の絵は, 重なる紙継ぎを繰り返した, ある二巻本の絵の下巻を元にしていう(松本寧至2000)。従って, 現存する二巻本下巻の絵の順番とは必ずしも重ならない。ただし絵の内容は変わらないので, ここでは問題としない。
- 16) 『大成』は「は、は、」と翻刻。但し「はらカ」とあるので改めた。寛延三年本を底本とする『古典大系本』の底本は「はう」とあり, 諸本により「はら」に改めている。
- 17) 『大成』は「見たやうす」と翻刻するが, 諸本により「見たにやらす」と改めている。

〈参考文献〉

- 出雲朝子(1995)「中世末期における東国方言の位相——『鼠の草子絵巻』の絵詞をめぐって——」『国語と国文学』72-11 64 - 75 頁
- 岡見正雄(1983)「御伽草子絵」『御伽草子の世界』(三省堂)1-16 頁
- 小松茂美監修(1993)『能恵法師絵詞 福富草紙 百鬼夜行絵巻』(続日本の絵巻 27)中央公論社
- 小峯和明(1992)「画中詞の宇宙—物語と絵画のはざま」『日本文学』14 - 7 24 - 37 頁
- 小山聡子・五月女肇志・原田由来恵(2007 ①)「『福富草紙』(上巻)注釈」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』7 229-253 頁
- 小山聡子・五月女肇志・原田由来恵(2007 ②)「『福富草紙』(下巻)注釈」『古代中世文学論考』19 347-382 頁
- 榎原悟(1987)「放屁譚三題附『ざれ絵』詞書」『サントリ—美術館開館 25 周年論集』
- 野村雅昭(1995)「談話資料としての落語——『火焰太鼓』を例として」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 3 分冊・日本文学演劇美術史日本語日本文化 41 11 - 24 頁
- 野村雅昭(1996)「発話機能から見た落語の談話構造」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 3 分冊・日本文学演劇美術史日本語日本文化 42 23 - 34 頁
- ポリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 松本寧至(2000)「『福富草紙』の復元——『福富長者物語』の構成にも及ぶ」(『中世文学の諸問題』所収, 新典社) 160-183 頁
- 美濃部重克(1978)「『福富長者物語』本文攷」『伝承文学研究』22(→『中世伝承文学の諸相』所収, 1988)221-254 頁
- 美濃部重克(1985)「御伽草子の絵と詞章」『解釈と鑑賞』50 - 11 58-66 頁(→改稿「御伽草子の表現の仕組み——絵と画中詞」『中世伝承文学の諸相』所収, 1988)
- 横山重・松本隆信編(1983)『室町時代物語大成第十一』角川書店
- 吉橋さやか(2009)「『福富草紙』の画中詞をめぐって」『立教大学日本文学』102 25-38 頁

【付記】本稿は「古典文学作品におけるテキスト談話研究」(平成 22・23・24 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号 22520459 高崎みどり研究代表)の「科学研究費補助金研究成果報告書」(未刊)に掲載したものを一部改稿したものである。